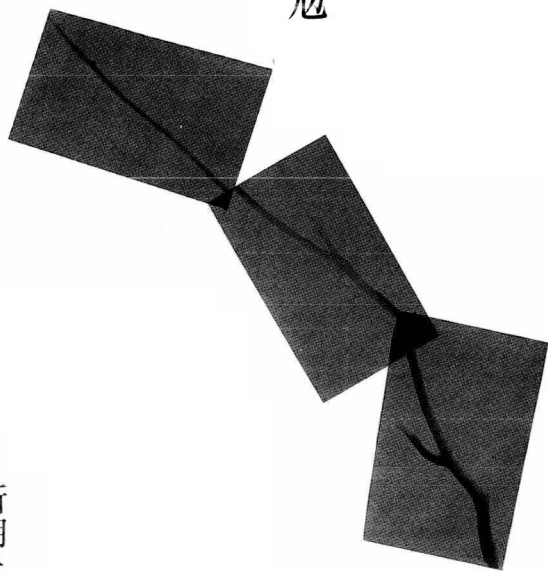


瀋陽しんようの月

水上勉

瀋陽しんようの月

水上勉



新潮社



© Tsutomu Minakami 1986 Printed in Japan

しんよう
つき
瀋陽の月

昭和六十一年十一月十五日 発行
昭和六十二年二月二十五日 六刷
定価／一〇〇〇円

著者／水上勉
みなかみ つとむ

発行者／佐藤亮一

発行所／株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(03)二六六一五一
編集部(03)二六六一五四

郵便番号 一六二

振替 東京四一八〇八

印刷所／株式会社光邦

製本所／加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-321119-9 C0093

瀋陽の月

ことしの夏末に、大連から瀋陽へ行ってきた。これという用事があつたわけでもなかったが、かぞえで十九歳の頃、やはり夏から冬にかけて瀋陽に住んだことがあつて、当時の家やつとめていた会社の職場の様子などを、機会を見てたずねてみたいと思つていた。といつても、ぼくもことし六十七歳で、十九といえざつと四十八年も前になる、いくらなつかしいと思つたつて、往時の家がそのまま残つてもいないだろうし、街の様子だつて變つてゐるだろう。かりに念願かなつて行けたにしても、失望して帰るのがオチかもしれぬ、と思われもした。ところが、この九月はじめ、頼んであつた先から、北京にある対外友好協会本部の張和平さんが、電報をよこして、下調べも出来たからすぐおいでなさい、とい

われている由。報らされてびっくり、仕事もつまっていたが、それにこの夏は頸椎に損傷が生じて、左手肩あたりから小指の根までに痛みが走って、病院通いだったけれど、機会をはずせば、いつのことになるかわからぬと思い直し、段取りをつけて五泊六日の予定で出かけることにしたのであった。

七十近くなると、己れがしてきたことが気になりはじめ、とやかく昔にこだわって、古手紙や日記の類を取りだして、つねには思いだしもしなかった青年時や、幼少年期のことなど、人に聞きただしたり、自分の足でそこまで訪れてみたりして、余生をおくる話はよくきく。正直、そういう思いもほくにはいえない。物書きのつねとして、いつもひきずっているものの結び目を確めながら机にむかわねばならぬのは当然であるけれど、日記やメモさえ計画的にのこす性格でもなかった自分には、過去は大半わすれたままになっていることの方が多かった。それで、暦の根雪に埋めるといったって、わすれられればそれに越したことはないし、そうそう昔のことをていねいにひっくりかえして、ああだった、こうでもなかったと、逆日めくりを繰るみたいな、趣味ももちあわせなかったのだが、満州（ぼくたちのいた頃はそうよんだ中国東北部）のことだけは、昨今になってとりわけなつかしく思いだされていたのである。ひとつはテレビや新聞で、不幸な戦争時に日本人が

現地にのこしてきた子女たちが、実父母を求めて、集団でやってくるニュースなど見てみると、その子らの年ごろと養父母たちの年齢が、わが身の年齢にかさなつて、他人事とも思えない気持ちにさせられて、家内や子供の前で息むせることもたびたびあった。じつは、こんどの旅の飛行機上でも、ほぼ満員に近い乗客の中に、第何次かの遼寧省を中心の日本人孤児たちの帰国組とぼくは偶然乗りあわせるのだが、それはまたのちにふれるとして、家内や子供にさえくわしくはなしていない自分だけの四十八年前のあの時代へ、自分は自分なりに立ちもどつて、わすれたままになっていることや、意識してわすれようとしてきたことなどの詰まっている満州時代の空白部分を、この際にたしかめておきたいものだ、としきりに思いはじめたのである。大げさな物言いになるかもしれないが、人は七十近くなれば、それぞれの死仕度をはじめめる。あれこれ古い事どもにこだわりはじめめるのもその証しかもしれない。自分のしてきたことは自分の責任だ。人にかわつてもらえるものでもないのである。

ところで、ぼくの中国ゆきは、こんどがはじめてではなかった。物書きになつてから、縁が生じ、作家派遣団の一員にもなり、北京、洛陽、西安、延安、南京、成都、桂林、杭州、上海など、必見のコースともなっている名所旧蹟の多い都市のだいたいは見物してい

たし、書いたものを上演する劇団について主要都市を旅行して歩いたり、都合、解放後の中国へは六回出かけていた。ところが、東北部、つまり旧満州にゆくのははじめてである。ゆきたい思いはつのりはしたけれど、たいがいが団体旅行であつたために、自分だけの暦にかかわる、わがままな行動は控えたいという思いもあつたことは確かであつた。下調べを依頼しておいた対外友好協会の張和平さんは六回の訪中ですっかり親しくなつた人で、日本へ来られても、東京の家へ招いて交友してきた、ぼくには数少ない中国の友人のひとつりだつた。その張さんが、ぼくが折にふれて文芸誌などで、青年時にくらしの大連、瀋陽のことを書いたものを読んで、往時の家のことや、街のことや、会社の作業現場のことなどを調べておいてあげようといってくれて、それがいくらかめどがついたらしい。ありがたいことだつた。片手のリユーマチなど押し切つて出かけねばならなかつたのは、ひとつは張さんの親切を無に出来ない思いもあつたからである。めぐまれた再訪といえた。だが往時といつても、十九から二十歳にかけての、ぼくにすればもつとも貧乏な時代で、世話になつていた禅寺をとび出し、しばらく京都市内で薬局店員をしながら、立命館大学の夜間部へ通つてはいたが、戦争も大はばにひろがつてゆくころなので、文科の廃止説もとび、学業にも嫌気がさして、荒れていた時である。学資稼ぎにつとめた京都府庁の仕事

は当時は満州移民開拓団といったり、開拓義勇軍といって、政府が地方自治体に、しきりと募集をせきたてていた移民事業の手伝いであった。寺を出たために、勘当同様にもなった若狭の親許へ帰るわけにもゆかず、一日、募集する側から、募集される側にひそかにまわりこんで審査をうけ、孤独に渡満したものの、すぐ肺病にかかり、強制帰国を命じられるまでのわずか半年にみたない期間のことである。自分では、わすれがたいことがつまっている気はするけれども、他人、ましてや、中国の親しい友人にしたって、かわりもなかった四十八年も前の、貧乏男の放浪時代の場所の詮索など、よほどのことでなければつきあってももらえまい。めぐまれたといったのはそのところで、のちにもふれてみたいと思うのだが、いまはぼくの身の辺のどこをさがしても、そういう人は日本にもいない気がする。

2

北京空港でその張和平さんと出会い、用意してもらったホテルに一泊して、先回の旅行

で世話になった協会の会長さんが療養先を退院なさっているときいたので表慶をかねて見舞ったあと、すぐ飛行機にのつて、大連へ一時間とちよつとで着いた。九月二十日の午前十一時である。こういうことも、自分だけの胸をあかせば、四十八年前にくらべると夢のようなことで、あの頃つまり十九歳の時、ぼくは六十七まで生きられて、物書きになつていふなど想像もしていなかった。当時は満州は遠い国であつたし、ゆけば二どともどつてこれない、命果てる場所と心にきめて、ぼくは移民船にのつていたのだから。

空港から車で南山賓館という、山の手にある新しく出来た鉄筋四階建ての閑静な宿で昼食したあと、張さんの友人の案内で市内散策に出かけ、張さんに希望しておいた旧大山通り、浪速町、埠頭、蓬坂町といった思い出の場所へ出かけた。中国の主要都市には、張さんのつとめる対外友好協会の支部組織がある。外国からの客を案内接待する係である。張さんの友人は、冷連全といい、三十前後と思われる日本語も達者な人であつた。ぼくらが中国人に最初に会つた場合、挙動や顔かたちから、何としてもこれは中国人だと思わねばならぬような人と、その反対に、日本にいても日本人で通るような風貌骨格の人はいるものだ。冷さんはどちらかといえば後者で、ぼくの従弟に、ながらく舞鶴市役所につとめ、市長つきの運転手をして、いまは京都にいる水上和夫というのがある。その顔によく似て

いた。温厚だが、しつかりしたところのある眼つきで、時々、おぼつかない日本語に当面すると、正直にそれをさげすみに訊ねてこられるのも信頼がました。

「蓬坂町には、困りましたね。ずいぶんむかしのことですし、殆んどそういう商売をした日本人や朝鮮人の館はのこっていません。しかし、多少の面影はありますから、先ず、そこへ案内しようと思います」

ぼくは行先が行先なので、ちよつと冷さんにわるいような、うしろめたさをおぼえた。というのは、蓬坂町は、ぼくが大連にきた頃の遊女町で、日本人も多少はいたようだが主に、朝鮮人女性が軀をひさぐ町であつた。なぜ、こんなところを再訪先の下調べにあげておいたか。そのわけを話さねばならぬ。

さきにもふれておいたが、ぼくは京都府の雇職^{やとひ}で、移民の仕事をしていた。組織の先端は、職業紹介所と口入屋で、いまは安定所と名もかわっているが、むかしは、紹介所といひ、民間の口入屋を吸収して、公営になってまもない頃だ。府庁には職業課があり、総務局厚生部にぞくし、内務省の管轄である。口入屋というのは、女中や水商売の求人口をいくつももつていて、失業女性や、つとめ替えを願う者の要求をきいて、先の世話をして身元引受までしてくれる商人だつた。盛り場に近い場所に「口入」と染めぬいたのれんを質

屋のようにたらしめて、やとなさん入用、給金多額宿舍付、などといった墨書の紙切れを、外に貼りだして通行人に眼立つようにしていた。くわしくは知らないけれど、職業紹介法が出来てから、漸次町から姿を消した商売である。ぼくが府庁につとめた年まわりは、まだ、大口の民間商人がいて、多少の調査対象になった気がする。満州移民は、官民あげての国策だったから、いろいろな方法で市中にあぶれた失業人口から募集された。府に職業課が独立し、義勇軍や農業移民の勧誘がはじまるのは昭和八、九年頃かと思う。文部省や農林省と連携がとられ、直接府の職員が、地方の学校や役場へ出かけて、小作農業の一家や高等小学校を卒業したばかりの子らを説得して、渡満させるべく、必死になって映画やパンフレットをもちまわった。ぼくもそれをやった。しかし、その学校まわりや、府下の町村役場まわりは書記とか主事補の役目で、ぼくは雇^{やとい}だから下っ端ゆえ、「大陸の稲つくり」「内原訓練所だより」（青少年義勇軍養成機関の一つで茨城県下にあり、所長は加藤完治であった）などのフィルムと幕と映写機をかついで出かけてゆき、上司が大陸開拓の必要性について演説するのをわきできいてから、映画を公開したあと、募集要項を印刷した書類だとか、入団申込書などを露天の机上に置いて、帰りの客を誘い入れる仕事をうけた。

またそのほかに、市内の職業紹介所や口入屋をまわつて、ポスターや書類をくぼる仕事もあつた。たしかに口入屋へも行つた記憶があるから、職業紹介法が制定されても、猶予期間がみとめられて、水商売などの求人口を世話する店は細々ながらつづけていたと思う。あれはわすれもしない、下京区の大宮通り七条を少しあがつたあたりで、岩本屋とかいう、女性ばかりではなく男性の、やがて戦時雇傭統制令にひつかかる床屋職人、時計職人などを世話する口入屋があつて、かなり規模も大きかった。何か報告に手落ちがあつて確かめに使つたのではないかと思う。報告書というのは、求人、求職両方の件数の報告であつて、これを「月報」といつていたが、紹介の成立、不成立にかかわらず、取扱つた件数を正直に報告することが義務づけられていた。紹介所もそれを守つた。口入屋も当然だつた。岩本屋は、電車通りに面し、二間まぐちの表を、一枚だけガラス戸をあけ、のれんをたらしつていた。入ると、土間があつて、五、六個の固椅子が壁ぎわにならび、帳場をかねた上り間に、質屋で見かける格子屏風とでもいうのか、低い囲いをめぐらせた内側に机をおき、五十年輩の主人がいた。その前に四、五人の着物、洋服まちまちの二十前後の、どうみても水商売の女性が腰をおろして、主人とこみ入つたことを話しあつていたらしかつたが、ぼくを見ると急に、女性たちは口を閉じてうつむいてしまった。それで話の内容が、

ほとくのような下っ端にしる公吏にきこえてはまずかつたらしいことがわかつた。入つたたん、女性の化粧ぶりがいくらからだらしくなくて、身のこなしなどから想像して、あるいは近くにある島原遊廓の娼妓か、またはべつの遊廓から、島原の妓楼に鞍替えを依頼にきているようにも思えたので、バツのわるさもあつたのと、もう一つまばゆいような、妙な気分になつて主人に書類だけわたして、すぐ退去した。何でもないこの光景が頭にのこつたのは、ひとつは口入屋がこの当時、法にきめられた職業外の職業（管内紹介所の求人口に、料理飲食業はあつたけれど、公認の接客業たる芸妓、娼妓の欄はなかつた）のみを紹介すること、息をつないでいた形跡があり、それらの私設外交員のことを「ぜげん」などと世間ではよんだことを思いだしたからである。つまり、口入屋が、職業紹介所の公営とともに市内から姿を消したと書いておいたけれど、実際は地下にもぐつて、芸娼妓の周旋事業はつづけていたのだと思う。岩本屋が、表通りにのれんをたらし、堂々と営業していたのは、新設された公営職業紹介所とも連絡をとつて、表向きには男子の店員、職人の斡旋もやつたせいだろう。ほとくがその日見てしまったものは、もう一つの岩本屋の顔ではなかつたらうか。いつの世も政府が民間事業を制してやめさせる場合、もう一つの闇の道が失業者から求められて、商人はもぐり商いをはじめ。のちの売春防止法の場合を見て

もあきらかである。ぼくがこんなことにくどくどとこだわっているのは、じつは、ぼくらがあんなに政府の力や援助を得て勧誘に走りまわっても、地方の谷間の村から、おいそれと青少年が義勇軍に入ってくれるとはきまっていなかったし、とりわけて辺境といわれる丹後、丹波の寒村へゆくと、子女ばかりでなく丁稚小僧の小学卒の子までが口入屋に先取りされて、失業者は殆んどなかったからである。村の娘たちは、移民団へ入るより、親許の近くで働けてすぐ金のはいる手っ取り早い京都の水商売をえらんで、口入屋の外交員をたよった。あるいはまた同じ水商売でも収入の多い大陸へ口入屋の世話で勇敢にわたった。のちのぼくの調査でわかるのだけれど、大連には四十万の日本人が移住していた記録は、もぐり業者の世話による水商売の女たちで風俗営業も繁昌したことを暗示するのである。

ぼくが神戸から乗った移民船のはるびん丸はそのような口入屋の世話で移住してゆく女たちや、里帰り組やで満員だったが、国の世話による移民団もいて、農業開拓団ばかりでなく、京都職業紹介所が組織した「第七次国際運輸株式会社新要員」の一隊もいた。ぼくはその仲間だった。

ぼくらのほかに、満鉄や、何某公社やの新要員とわかる一団もいた。何日かの里帰りを楽しんで、移住地へもどるらしい親子づれもいた。潜水艇に乗ったみたい、船底に近い

三等船室では、ようかん色の水のうねりしか見えない丸窓がならんでいるだけなので、光りがなくうす暗かったが、十人一区劃ぐらいの薙敷きの板間は手すりだけの垣根なので、全体がよく見わたせた。移民組には旗がくくりつけられていた。一般組は、旅なれた感じだった。その中でも、ぼくらのような年齢もまちまちの、子づれのまじる移民団は、人目をひいていたようだ。甲板へ出てみると、四、五人の女だけの小グループがあつて、身態りや化粧の厚さからひと目で水商売ゆきとわかる派手な仲間が、手すりにならんで笑い興じていた。こんなグループにも、口入屋が世話した先の店の主人や、募集係の男がついていたし、ぼくらのような職業紹介所組も会社からきた係員が監視しているのだった。当時は自由に渡満できたにしても、先は外国にちがいはなかったから、取締りもきびしかった。門司での給油時間がすぎて、船が玄海灘へ出る頃に、移動警察官の巡視があつたと思う。いろいろな男女が混在していた三等船室の光景は、のちの残留日本人孤児たちの生年とかさなつてまるで古い写真をめくられたようにうかぶ。じつは孤児たちの実父母になつた人々の移民風景にちがひなかった。ぼくが、家内や子供の前で、孤児たちが実父母と対面する写真を見ていて、ついむせてしまう理由の一つは、この日の移民船が思いうかぶからであつた。ぼくらはあの日、殆んどの者は、日本軍国政府のいうとおり、満州には王道楽